

〔関係〕を表す形容詞述語文の構造

朴 海 煥

【キーワード】 〔関係〕 文型論 文の構造 語の意味 助詞の機能

【要旨】

本稿は、形容詞述語文について文型論の観点から語の意味を研究したものである。つまり、述語を軸として結合する名詞句⁽¹⁾と助詞の三者間の結びつきの構造とその構造を決定づける原因・背景となる語の意味的な特徴との関係を分析した研究である。

形容詞述語文の中でも、本稿では「親疎(親密・密着)、異同(異同・類似・相似)」など自然や人間活動にかかわる二者以上の関係を表す文を分析の対象とする。このような意味を表す形容詞文について、まず実際の言語作品の用例から文型を抽出し、各々の文型における名詞句の意味特徴や助詞の役割などを詳しく分析することで、文の構造と語の意味との関係を明らかにすることに研究の重点を置く。

このような研究は、結合価や格支配などを含むより広い範囲の文構造の分析、語の意味論と構文論の文法論との接点の追求、文型による新しいタイプの語の意味記述などの面で有意義な広がりを持つと思われる。

1. はじめに

人間の使う文レベルの表現は、多くの場合文法的ともいえるある種の規則性に基づいた構造を有している。そして、そのような構造を決定づける最も重要な要因の一つとして「語の意味的特徴」が挙げられる。本稿では、この「文の構造と語の意味との関わり方」について〔関係〕を表す形容詞述語文を対象にして分析を行う。分析において特に注目したい所は、文の主たる構成要素である「名詞句・助詞・述語形容詞」の三者のむすびつきの構造とその原因・背景の究明である。具体的には、名詞句と述語形容詞の場合はその意味的な特徴を、助詞についてはその役割を分析することで、文の構造と語の意味との関係を追求していきたい。このような点から本稿は形容詞述語文に対する文型論的語義研究としての一つの試みといえる。

形容詞述語文の中でも特に〔関係〕を表す文を選んだのは、文の構造と語の意味との関係、特に助詞の働きの面などにおいて最も特徴的な使われ方を見せているからである。また、〔関係〕という述語形容詞の意味項目を設けたのは、〔関係〕の意味を表す一語一語の形容詞の用法の特徴と〔関係〕という意味を表す形容詞群全体の特徴を同時に分析するためである。分析考察の対象となる資料としては主として実際の言語作品からの用例を使

う⁽²⁾。助詞に関しては「が、から、で、と、に、は、より、を」を分析の対象とするが、特に「から、と、に」などの用法に注目したい。

このような観点から、本稿ではまず「関係」の意味を表す形容詞の範囲を決め、それを下位分類した各々の項目について分析を行うことにする。分析の順序としては、各形容詞文について、まず言語作品の用例から文型を抽出し、次に各々の文型における名詞句の意味特徴や助詞の役割など文の構造と語の意味との関係を分析する。分析の結果としての文型と名詞句の意味特徴に関する全体的な一覧は本稿の結論として「6. おわりに」に提示する。

2. 「関係」を表す形容詞

本稿でいう「関係」の形容詞文とは、自然や人間活動にかかわる二者以上の関係を表す文を対象とする。具体的には人間関係の親密度、物事の関係の密着度、関係の異同性と類似性などが挙げられる。本稿ではこれをさらに「親疎」の形容詞文と「異同」の形容詞文の二つに下位分類する。(表1)はその下位分類の基準と対象語彙⁽³⁾を示したものである。

(表1) 下位分類の基準と対象語彙

分類	分類基準および語彙	
親疎	基準	関係の親密・密着度の意味を表すもの
	語彙	「親しい」 「熱い、いい、おかしい、固い、近い、冷たい、遠い、深い、悪い」等
異同	基準	関係の異同・類似・相似を表すもの
	語彙	「等しい」 「近い、遠い」

以下、(表1)の下位分類に従い、各々の形容詞文における文の構造と語の意味との関係について分析・比較していく。

3. 「親疎」の形容詞文

3.1. 「親しい」

3.1.1. 「名2は・が+名1と+形」⁽⁴⁾

「親しい」は形容詞の表す「親疎」表現の対象として二項目の名詞句を要求する典型的な例である。基本構造としては、例文(1,2)のように「名2は・が+名1と+形」のような構文を取り、第2項目⁽⁵⁾と第1項目の二つの項目にあたる名詞句が「親疎」表現の対象と

しての性格を持つことになる。

(1)「(前略)石田さまは、天王寺屋と親しい。(黄金251) (6)

(2)私はカンナさんのお母さん中村メイコちゃんとは仕事の上で大変親しい(見え241)

この構文の名詞句の意味特徴としては、第1、2項目共に主に<人間> (7) そのものを表す名詞句が来ることが挙げられる。それは「親しい」が本来人間同士の関係の親密度を表す形容詞であるからである。<人間>そのものを表す名詞句の他に家族・団体・国家など人間が所属している集団を表す名詞句も使われる。それは、この類の名詞句の背景に<人間>という意味特徴が働いているからであることは言うまでもない。また、このような集団を表す名詞句の場合、その集団を構成している複数の存在は「集団」という一つの単位に収まって使われる。情報処理振興事業協会技術センター(1990)と飛田良文・浅田秀子(1991) (8) ではこの<人間>関係の名詞句のみを記述しているが、「親しい」文の名詞句の意味記述としては不十分さを感じる。

一方、(3)のように<人間>を表す名詞句と<集団>を表す名詞句が一緒に使われることはない。

(3)? 太郎は「ことばの会」と親しい。

この例文が自然な文として成り立つためには、「ことばの会」という<集団>の名詞句が、「ことばの会の人(たち)」のように具体的に<人間>を表す意味を持つことが要求される。

<人間>関係の名詞句の中でも親子・兄弟・夫婦などは普通に使われない。その理由は、このような名詞群は語の意味特徴として<関係の親しさ>が前提になっているからである。しかし、(4)のように、親しい関係でないことを表す何らかの条件が前提とされる時には使われることもある。

(4)太郎は兄とは仲が悪いが、姉とは親しい。

助詞は「名2は・が+名1と+形」のように第2項目は「は・が」、第1項目は「と」をとるのが一般的である。助詞「に」はとらない。それは、「親しい」文の場合、名詞句の性格として判断の基準ではなく、表現の対象のみを要求するからである。助詞「に」の判断の基準としての役割については「4. 【異同】の形容詞文」で詳しく述べる。

3.1.2. 「名1は・が+形」

「3.1.1. 「名2は・が+名1と+形」」のような二項目表現は〔親疎〕表現の対象すべてが第1項目に収まって一項目表現として使われることもある。この一項目表現には二種類がある。その一つは、例文(5, 6)のように二つの表現対象が「～と～は」や「～と～とは」の形で使われる用法である。

(5)山田さんと彼は、生前親しかった。(IPAL613)

(6)けい子さんのおっしゃるように、わたくしとけい子さんとは親しいんです。

(紅花75)

もう一つは、例文(7)のように「と」はなく、二者以上の表現対象が「～は・が」の形で使われる用法である。

(7)演奏者同士が親しい。(IPAL613)

この一項目構文の場合、二種類共に名詞句の意味特徴として<人間>関係の名詞句が来る点では二項目表現と同様である。特に、前者は「名2は・が+名1と+形」の二項目表現の二つの表現対象を助詞「と」を使って一つの項目にしたため、当然<人間>を表す具体的な名詞句が使われる。ただし、後者の場合は特定のでない二者以上を表現対象とするため、「演奏者同士、二人の演奏者、演奏者たち」の「同士・二人・たち」のような二者以上であることを示す名詞句が要求される。

情報処理振興事業協会技術センター(1990)⁽⁹⁾ではこの一項目表現を「親しい」のとり基本構造としている。【親疎】は本来二者以上の要素を対象とする表現であることを考えると「名1は・が+形」のような一項目表現ではなく「名2は・が+名1と+形」のような二項目表現を「親しい」の基本構造と見るのが正しいであろう。

3.2.「熱い、いい、おかしい、固い、近い、冷たい、遠い、深い、悪い」など⁽¹⁰⁾

3.2.1.「名3は(が)+名2と(に)+名1が+形」

これらの語群の形容詞文の基本構造としては「名3は(が)+名2と+名1が+形」の三項目表現が挙げられる。

(8)バドミントンの時でも根上君は小坂映子さんと特別に仲がよかった。(思春143)

(9)ホトトギスは日本の文学と縁が深い。(鳥の86)

(10)息子のサウド王は凡庸でその弟のファイサル殿下と仲が悪い。(旅の226)

名詞句の意味特徴としては、まず、【親疎】表現の対象となる要素すべてが第3、2項目に来ることが挙げられる。【親疎】の対象にあたる名詞句には主に<人間や集団>を表すものが使われるが、<事柄>的な性質のものが使われることも多い。事柄的性質の名詞句の場合は、例文(9)のように主として関係の密着度を表す。次は第1項目の特徴である。第1項目には「絆・仲・関係」など<関係>そのものの意味を表す名詞句が来る。これは「親しい」文と比べて特記すべき点である。「親しい」文は語義的な特徴として<関係>の意味を含めているため、<関係>そのものを表す名詞句は必要としない。

助詞に関しては、第3項目には「は(が)」、第2項目には主に「と」が来る。第2項目に「と」を使う場合、三項目の表現になるのが「親しい」文と対照的である。つまり、この類の形容詞文は第1項目には必ず<関係>そのものを表す名詞句が要求されるため、【親疎】の表現対象が二つの項目で表現される時には全体としては三項目表現になる、ということである。一方、例文(11)のように「と」の代わりに「に」が使われることもある。

(11)神は日本文化に深い関係が深い。(IPAL1010)

この「に」の項目は判断の基準の性格を持って判断の対象を表すもので、助詞「と」と「に」との接点に当たる用法といえる。これと逆の現象が【異同】の「等しい」文にも現れる。

3.2.2.「名2は(が)+名1が+形」

この構文は、「名3は(が)+名2と(に)+名1が+形」表現の第3、2項目が一つの項

目に使われる用法である。

(12) 島田さんと友の会の人びとは「同事」で結ばれているだけに、きずなが固い。

(天声860201)

(13) 病室で患者同士は仲がよい。(脳卒84)

(14) 両国は関係が近い。(IPAL773)

(15) でも、二匹は仲が悪い。(水晶22)

この構文の名詞句の意味特徴は、三項目表現と同じように<人間や集団>または<事柄>を表す。ただし、三項目表現の第3、2項目を一つの項目にしたため、「～と～とは、～同士・たち、二人・両国・二匹」などの二者以上の表現対象をしめくくる形式や要素が要求される。助詞に関しては、第2項目には「は(が)」、第1項目には「が」が来る。

3.2.3. 「名1は・が+形」

このグループの形容詞文にも例文(16, 17, 18)のように「親しい」文の「名1は・が+形」のような一項目表現がある。名詞句の項目の数が一つである場合は、[親疎]表現の対象にあたる要素すべてと「絆・仲・関係」などの<関係>そのものを表す語が第1項目の名詞句によって表現される。

(16) このごろ夫婦の仲は、冷たかった。(四季68)

(17) 両家の血縁関係は遠い。(IPAL845)

(18) もともと、地理的に近いせいでなく、堺と本願寺との関係は深い。(黄金80)

3.3. 上記の他に「親疎」の形容詞文には次のような特徴がある。

①助詞「より」も使われる。

②「親しい」は「～は～が」文はとらない。

③「親しい」には三項目の表現が見当たらない。

4. 【異同】の形容詞文

4.1. 「等しい」

4.1.1. 「比較基準による同等判断」を表す表現

①「名2は・が+名1に(と)+形」

「等しい」文の最も基本的な構造は次の例文のような「名2は・が+名1に+形」の二項目表現である。

(19) 「(前略)他者に対する誠意もしくは思いやりがなければ、テクノロジーの時代は地獄に等しい。」(記者28)

(20) 孤独な旅の中で、プライドを失うことは、ほとんど死に等しい。(インド192)

本来「等しい」は複数の物が全く同じであるという「同価」を表すのを本義としている。が、現代の実際の言語生活での「等しい」の使われ方には「同価」の用法より「比較基準による同等判断」の用法の方が圧倒的に多い。「同価」を表す表現には形容動詞「同じだ」

が多く使われる⁽¹¹⁾。本稿でこの「比較基準による同等判断」の用法を「等しい」文の代表的な用法にした理由もここにある。

この構文の名詞句の意味特徴としては、第2項目には比較の対象、第1項目に比較の基準の性格を持つ名詞句が来ること、第1、2項目共に主として事柄的な意味の名詞句が来ることなどが挙げられる。＜人間＞そのものを表すことが少ないのは「親しい」と比べて対照的な点である。また、第1項目には、それが比較の基準の性格を持つため、第2項目より具体的な意味の名詞句が来る傾向がある。

助詞としては、第2項目に「は・が」、第1項目には「に」が来るのが一般的である。第1項目には例文(21)のように「と」も使われる。

(21)小説の女主人公は、金銭こそ取らなかったが、その度数の上では女郎とひとしかった。(四季325)

この場合二つの項目の順序の交替は不可能である。この点は、次の「4.1.2.「同価」を表す表現、②「名2は・が+名1と+形」」の「と」の使い方は異なる特徴である。これは「に」は比較の基準を、「と」は比較の対象を表すという助詞の動きの相違による文の意味の違いである。ここに使われている助詞「と」は、その役割としては判断の基準の性格を持つ。助詞「に」と「と」の接点に当たる用法とも言えよう。

②「名3に+名2は・が+名1に+形」

「等しい」文には「等しさ」を感じる主体が文中に明示される場合が多い。この場合、文の構造としては例文(22)のように「名3に+名2は・が+名1に+形」の三項目をとる。

(22)西海岸の生まれの彼にとってタイを締めることは拷問に等しい。(ハー38)

(23)潮鳴りは、この港町に生まれ育った者には、故郷の歌に等しい。(秀吉418)

この構文の場合、例文(23)のように第3、2項目の順序の交替は自由である。また、「等しさ」を感じる主体の項目には主に＜人間＞そのものの意味を表す名詞句が来る。助詞としては「に」が使われるが、この「に」は「にとって・には」などのような形をとる。これは、本来状態形容詞である「等しい」を感情形容詞的な用法として使う時に起こる現象である。その結果、「名3に+名2は・が+名1に+等しい」という表現は、「名3は名2を名1と等しいと思う」のような感情表現としての意味を表すことになる。

4.1.2.「同価」を表す表現

①「名1は・が+形」

「等しい」文が二者以上の表現対象が同価であることを表す時は基本的に「名1は・が+形」のような一項目表現をとる。

(24)K Pにあっては、パルプと廃棄物の量は、ほぼ等しい。(瀬戸132)

(25)計ってみればこのプラスチックの洗面器の直径と、洗濯機の円筒の直径は等しい。(逆転84)

(26)2の3倍と3の2倍は等しい。

(27)二等辺三角形の両底角はひとしい。(用法476)

この構文の場合は、「同価」を表す〔異同〕の表現対象にあたる要素すべてが第1項目の

名詞句によって表現される。名詞句の意味特徴としては＜量＞を表すものが来るのが一般的である。項目の形式としては、「バルブの量と廃棄物の量は」の「～と～は」、「バルブの量と廃棄物の量とは」の「～と～とは」、「二等辺三角形の両底角」の「両・二」などで括る用法、などがある。この表現には「4.1.1.「比較基準による同等判断」を表す表現、①「名2は・が+名1に+形」」のような判断の基準としての性格はない。その代わり、「量・両底角、2の3倍と3の2倍」のような同価判断の具体的単位または数値を表す名詞句が要求される。

②「名2は・が+名1と+形」

「①「名1は・が+形」」の同価表現の中で表現対象が二つである場合は、例文(28)のように「名2は・が+名1と+形」の構文に替えることができる。同様に、文の結果的な意味をそれほど変えずに(29)のように名詞句を入れ替えることも可能である。

(28) 計ってみれば洗濯機の円筒の直径は、このプラスチックの洗面器の直径と等しい。

(29) 計ってみればこのプラスチックの洗面器の直径は、洗濯機の円筒の直径と等しい。

③「名2は・が+名1に+形」

一方、「同価」を表す形容詞文には例文(30)のような「名2は・が+名1に+形」の構文もある。名詞句の意味特徴として主に「量」を表すものが使われる点は上記の「名1は・が+形」や「名2は・が+名1と+形」構文と同様である。しかし、この構文は、「名2は・が+名1と+形」構文とは表現主体の意識の面で文の意味が異なる。

(30) 8は2の4倍に等しい。(用法476)

(31) 2の4倍は8に等しい。

(32) ? 2の4倍に8は等しい。

この構文の助詞「に」で表現される第1項目は比較の基準としての性格を持つ。一方、「名2は・が+名1と+形」構文の第1項目「と」の場合は比較の基準ではなく、比較の対象としての性格を持つ。第1項目と第2項目との名詞句の入れ替えの自由度は「と」の方が高い。「に」の場合も入れ替えができなくはないが、そうした場合、(31)のように表現主体の意図が変わってしまう。この現象は、両項目の結果的な異同性とは関係なく、表現する主体の意識によって起こる違いである。というのは、前述のように「に」の場合はその項目が比較の基準としての性格を持っているからである。つまり、表現主体は助詞「は・が」の項目の名詞句を助詞「に」の項目の名詞句の基準に引き当てて比較判断することになる⁽¹²⁾。このようなことから、例文(32)のように項目の順序の交替にも不自然さが伴うことになる。情報処理振興事業協会技術センター(1990)⁽¹³⁾ではこのような「に」と「と」の項目の役割に関しては記述せず、＜同価＞を表す「等しい」文に「に」が使え、さらに「に」と「と」とは交替が可能であるとしている。名詞句の項目の性格や助詞の役割などを考慮に入れた上での適切な記述が必要であろう。

4.2.「近い、遠い」

4.2.1.「名2は・が+名1に+形」

この形容詞文の代表的な構造は「名2は・が+名1に+形」である。

(33)タイ人の水浴びはほとんど信仰に近い。(オラウ77)

(34)毎月政府が出す消費者物価指数は加重平均という方法をとっているの、こうしたトリックはないが、それにしても過去一年のインフレが二六%というのは生活実感に遠い。(天声740411)

この構文の名詞句の意味特徴としては第2項目には比較の対象、第1項目に比較の基準の性格を持つ名詞句が来ること、第1、2項目共に<事柄や量>的な意味の名詞句が来ることなどが挙げられる。また、「近い」の場合、第1項目が<量>の意味の比較の基準を表す時は例文(35、36)のように「等しい」文より具体的な数値の名詞句が使われることが多い。その理由は、「近い」は「等しい」に比べて異同の程度性の固定度が低いため、比較の基準としてより具体的な名詞句を要求するからだと思われる。

(35)しかし降雨量はゼロに近い。(魔頂177)

(36)そのデモの参加者の数は一万人に近かった。(IPAL775)

助詞としては、第2項目には「は・が」、第1項目には「に」が来る。

4.2.2. 「名2は・が+名1から+形」

「遠い」の場合は例文(37、38)のように第1項目に「に」の外に「から」も使える。というより、「に」よりも「から」の方が一般的な使い方だといった方が正しいと思う。「から」が使われる文は、表現主体が「から」項目の比較の基準をもって比較の対象の項目を判断する「基準→対象」のような方向性を持つことになる。

(37)今考えて見ると、党の要求からは遠い。(紅衛61)

(38)しかし紀三郎には、具足屋の鎧、兜を子どもの眼でただ奇妙に美しいものに眺めたように、小田原征伐の噂も実感から遠かった。(秀吉115)

【異同】を表す「近い」にこのような「から」の用法が見当たらないのは特徴的な点である。それは、「近い」も「遠い」も比較の基準による判断ではあるが、「近い」の場合は「等しい」に似ている意味で使われているからだと思う。この点は、「等しい」に「から」の用法がないこととも関係がある。つまり、【異同】を表す「等しい、近い」は「遠い」とは異なって、比較の対象を「に」項目の比較の基準に引き当てて判断する「対象→基準」のような方向性を持つため、「基準→対象」のような方向性を持つ「から」は使われないのである。

4.2.3. 「名3に+名2は・が+名1に・から+形」

「近さ、遠さ」を感じる主体が文中に明示されるとき表現は「等しい」と同様である。名詞句の意味特徴と助詞両方ともに「等しい」と同様な傾向を見せる。「遠い」文の場合、第1項目に助詞「から」が使える点のみが異なる。

(39)年功というわけのわからない功以外、官吏には功による昇給は絶無に近い。

(決断134)

(40)しかし紀三郎には、具足屋の鎧、兜を子供の眼でただ奇妙に美しいものに眺めたように、小田原征伐の噂も実感から遠かった。(再出)

4. 3. 上記の他に〔異同〕の形容詞文には次のような特徴がある。

- ①「等しい」は助詞「より」はとらない。
- ②「近い、遠い」には一項目表現は見当たらない。
- ③「近い、遠い」には「同値」を表す表現はない。

5. 〔親疎〕の形容詞文と〔異同〕の形容詞文との比較

以上、〔親疎〕と〔異同〕の形容詞文の用法について詳しく分析を行った。ここでは、両者の相違的な特徴を比較してみることにする。比較にあたっては、両形容詞文の代表的な語である「親しい」と「等しい」とその他⁽¹⁴⁾の形容詞文の二つの項目に分けて考察する。

5. 1. 「親しい」と「等しい」

「親しい」と「等しい」はそれぞれ〔親疎〕と〔異同〕の形容詞の代表的な語である。それだけに、これらの形容詞文には〔親疎〕と〔異同〕の典型的な相異点のいくつかが明らかな形で現れている。

5. 1. 1. 助詞と文型

「親しい」文の基本構造は「名2は・が+名1と+形」で、「等しい」文は「名2は・が+名1に+形」である。第1項目の助詞として「親しい」は「と」、「等しい」は「に」をとる。これは、表現の重心がどこに置かれているかによる違いである。「親しい」は「と」を使って〔関係〕表現の対象となる二つの要素をとりあげるだけであるから、ある一方が中心になるのではなく第1、2項目両方に重心が置かれる⁽¹⁵⁾。これに対し「等しい」は第2項目の比較の対象を「に」項目である第1項目の比較の基準に引き当てて判断するため、第1項目に表現の重心が置かれることになる。助詞「に」と「と」との役割の違いともいえるこの特徴は(41・42, 43・44)のように第2、1項目の名詞句を入れ替えてみることで明らかに確認できる。

(41)「(前略)その原田は、長谷川宗仁と親しい。(黄金251)

(42)長谷川宗仁は、その原田と親しい。

(43)それと同じことで、自分の下手な文章にいや応なしに直面することは、死のせめ苦に等しい。(脳卒20)

(44)?それと同じことで、死のせめ苦は、自分の下手な文章にいや応なしに直面することに等しい。

第1、2項目両方に重心が置かれている「親しい」文は名詞句を入れ替えても結果的な意味の変化は起こらないのに対し、「等しい」文の場合は入れ替えが不可能である。

一方「等しい」文にも、第1項目が「と」をとり「親しい」文と似たような使い方をする用法がある。が、この場合には第2、1項目の名詞句の意味に<同値関係>という制限

がつく。

また、「親しい」文は助詞「より」をとるのに対し「等しい」文はとらない点も対照的である。「等しい」は判断における程度性が固定されているため、比較判断を表す「より」はとらないと考えられる。形容詞文のほとんどが「より」の用法を持つことを考えると、これは「等しい」の語彙の特徴として特記すべき点であろう。

次は、三項目の構造に関してである。「等しい」文の場合は「異同性」を感じる主体が文中に明示される場合、その主体が助詞「に」をとり、「名3に＋名2は・が＋名1に＋形」のような三項目の構造を表すことになる。しかし、「親しい」文にはこの用法がない。これは、前述したように「親しい」文と「等しい」文の両者における名詞句と形容詞の意味特徴の相異から生まれる構造の違いである。

5.1.2. 名詞句の意味特徴

「親しい」文は第2、1項目ともに<人間>そのもの、あるいは<人間の所属している集団>といういわゆる<人間>関係の名詞句を要求する。それは、「親しい」が本来人間同士の関係の近さを表す形容詞であるからである。「等しい」文にはこのような名詞句の意味特徴における制限はない。「等しい」は人間同士の関わりというよりは「物事が同様であること、似ていること」を表すだけである。そのため、<事柄・量>的な意味特徴を持つ名詞句が来ることが多い。

5.2. その他の形容詞文

5.2.1. 助詞と文型

まず、第1項目の特徴である。「〔親疎〕のその他」には「絆・仲・関係」などの<関係>そのものの意味を表す名詞句を第1項目に置き、第3、2項目までに〔親疎〕表現の対象にあたる要素を置く用法がある。それは「〔親疎〕のその他」文がある二者以上の対象に対する関係の判断のみを表すことに原因があるように思われる。「〔異同〕のその他」にこのような用法がないのは、「〔異同〕のその他」文には必ず〔異同〕判断の基準としての名詞句の項目が要求されるからである。これは、〔異同〕表現の対象となる二つの要素の役割が違うことを意味する。そして、結果的には一つの名詞句で二つの要素をしめくくることはできなくなるのである。「〔異同〕のその他」に一項目表現が見当たらないのもここに原因があると思われる。

また、「〔異同〕その他」の「遠い」文の助詞に「から」が多く使われるのも〔異同〕表現の特徴として挙げられよう。これは、〔異同〕判断の基準としての項目の存在を明確に表している特徴ともいえる。「〔親疎〕のその他」の「遠い」に「から」の用法がないのは〔親疎〕文の特性上、判断の基準ではなく判断の対象のみを必要とするからである。

次は三項目の表現についてである。三項目の表現に関しては、「親しい」と「等しい」とを比較した時の特徴が、「〔親疎〕のその他」と「〔異同〕のその他」との間にも同じように存在する。表現および構造の原因についても同様のことが言える。

5.2.2. 名詞句の意味特徴

名詞句の意味特徴に関しては、「〔親疎〕のその他」文の方には主として<人間>関係の名詞句が、「〔異同〕のその他」文には<事柄・量>的なものが多く使われることが挙げられる。また、「〔親疎〕のその他」文は「親しい」文との使い分けがはっきりしていることに對し、「〔異同〕のその他」文の場合は「等しい」文と似ている用法が多いことも特徴的である。このような傾向は特に「近い」文に著しい。

6. おわりに

以上、〔親疎〕と〔異同〕を表す形容詞述語文について、各々の形容詞文における文の構造と語の意味との相関関係および特徴の相違点の比較を中心として分析・考察してきた。その結果、これら形容詞文のとり文型の背景には、名詞句と述語の意味的な特徴や助詞の役割がその原因として働いていることが分かった。特に、述語の意味特徴、助詞「に」と「と」の役割、第1項目の名詞句の性格および意味特徴などの点に著しい特徴の差が見られた。以下、本稿の結論として、両形容詞文の特徴の表れである文型を名詞句の性格および意味特徴と共に(表2)にまとめることにする。

(表2) 〔関係〕を表す形容詞文の構造

〔親疎〕の形容詞文	
親 し い	3.1.1.「名2は・が+名1と+形」: 例文(1~4) ・名2: 主に人間や集団、表現の対象 ・名1: 主に人間や集団、表現の対象
	3.1.2.「名1は・が+形」: 例文(5~7) 。「~と~は、~と~とは」: 主に人間や集団、複数の表現の対象 。「と」のない「~は(が)」: 主に人間や集団、複数の表現の対象、「同士・二人・たち」など複数を表す名詞が追加
そ の 他	3.2.1.「名3は(が)+名2と(に)+名1が+形」: 例文(8~11) ・名3: 主に人間や集団、その他事柄のもの、表現の対象 ・名2: 主に人間や集団、その他事柄のもの、表現の対象 ・名1: 「絆・仲・関係」など<関係>そのもの
	3.2.2.「名2は(が)+名1が+形」: 例文(12~15) ・名2: 主に人間や集団、その他事柄のもの、複数の表現の対象 ・名1: 「絆・仲・関係」など<関係>そのもの
	3.2.3.「名1は・が+形」: 例文(16~18) 。「主に人間や集団、その他事柄のもの、複数の表現の対象」+「絆・仲・関係」など<関係>そのもの
〔異同〕の形容詞文	

等しい	4.1.1.「比較基準による同等判断」表現
	①「名2は・が+名1に(と)+形」: 例文(19~21) ・名2: 主に事柄のもの、比較の対象 ・名1: 主に事柄のもの、第2項目より具体的、比較の基準
	②「名3に+名2は・が+名1に+形」: 例文(22, 23) ・名3: 主に人間、「異同性」を感じる主体 ・名2: 主に事柄のもの、比較の対象 ・名1: 主に事柄のもの、比較の基準
	4.1.2.「同値」表現
その他	①「名1は・が+形」: 例文(24~27) ・「～と～は、～と～とは」: 主に量、複数の表現の対象+量を表す具体的な単位や数値 ・「と」のない「～は(が)」: 主に量、複数の表現の対象、「両・二」など複数を表す名詞が追加
	②「名2は・が+名1と+形」: 両項目は同値、例文(28, 29) ・名2: 主に量、比較の対象 ・名1: 主に量、比較の対象
	③「名2は・が+名1に+形」: 両項目は同値、例文(30~32) ・名2: 主に量、比較の対象 ・名1: 主に量、比較の基準
	4.2.1.「名2は・が+名1に+形」: 例文(33~36) ・名2: 事柄や量的もの、比較の対象 ・名1: 事柄や量的もの、量は主に具体的な数値、比較の基準
	4.2.2.「名2は・が+名1から+形」: 「違い」のみ、例文(37, 38) ・名2: 主に事柄のもの、比較の対象 ・名1: 主に事柄のもの、比較の基準
	4.2.3.「名3に+名2は・が+名1に・から+形」: 例文(39, 40) ・名3: 主に人間、「異同性」を感じる主体 ・名2: 主に事柄のもの、比較の対象 ・名1: 主に事柄のもの、比較の基準

【注】

- (1) 本稿でいう名詞句とは、述語形容詞と結合する「体言+助詞」のうち、体言の部分を意味する。単独名詞ではなく句や節の場合もある。
- (2) 用例分析中心の方法論をとる場合、収集用例にない言語特徴の処理が問題になる。本稿では、先行文献や辞書類などの記述を参考にすることによってそのような問題点に対処している。

- (3)本稿で扱う形容詞は言い切りの形がイである形容詞のみを対象とする。また、「疎い」は使用頻度を考え、対象に入れないことにした。
- (4)助詞「は」と「が」が併用できる項目の場合、第1項目に「が」が使われない時は「は・が」、使われる時は「は(が)」と表記する。
- (5)名詞句の項目の順番に関しては述語形容詞から近い項目から「第1項目、第2項目、第3項目」のように表記する。一方、名詞句の項目の数に関しては「一項目、二項目、三項目」のように表記する。
- (6)(黄金21)のような用例出典の数字は収録のページを示す。ただし、(天声)の場合は新聞の記事であるため収録の日付を示すことにする。
- (7)< >は名詞句の意味特徴、[]は形容詞の意味特徴を表す。
- (8)情報処理振興事業協会技術センター(1990, P. PP. 612-613)
飛田良文・浅田秀子(1991, P. PP. 274-275)
- (9)情報処理振興事業協会技術センター(1990, P. PP. 612-613)
- (10)「いい・よい」は「いい」、「固い・堅い」は「固い」に統一表記する。
- (11)「等しい」と「同じだ」は文型や名詞句の意味特徴などの面で異なる点が多いが、それらに関しては今後の研究に回す。
- (12)森田良行(1989, P. 989)ではこれについて、「AをBに引き当ててみる比較で、「A→B」の方向をとる」としている。
- (13)情報処理振興事業協会技術センター(1990, P. PP. 972-973)
- (14)以下、[親疎]の形容詞の「熱い、いい、おかしい、固い、近い、冷たい、遠い、深い、悪い」などを「[親疎]のその他」、[異同]の形容詞の「近い、遠い」は「[異同]のその他」と略称する。
- (15)森田良行(1989, P. 522)はこれに関して、「A側だけの一方的関係ではなく、A Bの両者が主体として両立している関係」と記述している。

【引用用例出典】

- (色め) 『色めがね西洋草紙』木村尚三郎(1930男)ダイヤモンド社1977
- (インド) 『インド放浪』藤原新也(1944男)朝日選書1982
- (黄金) 『黄金の日』城山三郎(1927男)新潮文庫1982(1978新潮社)
- (オラワ) 『オラワン家の居候』鶴田育子(1960女)文藝春秋1987
- (女宴) 『女の宴』黒岩重吾(1924男)角川文庫1981
- (記者) 『記者の目女の目』下村満子(1938女)集英社文庫1984
- (逆転) 『続・逆転の発想』糸川英夫(1912男)プレジデント社1976
- (決断) 『決断の条件』会田雄次(1916男)新潮選書1975
- (紅衛) 『日本に帰ってきた紅衛兵』春井康夫(1942男)潮文社1991
- (四季) 『四季の旋律』丹羽文雄(1899男)新潮文庫1986(1981新潮社)
- (思春) 『思春期の告白-典子の800日-』伊東典子(1961女)光風社書店1977

- (天声) 『続・深代惇郎の天声人語』 深代惇郎(1929男)朝日新聞社1977
『天声人語・人物編』 辰濃和男(1930男)朝日新聞社1987
『天声人語・自然編』 辰濃和男(1930男)朝日新聞社1988
- (鳥の) 『鳥の来る日』 崎川範行(1909男)朝日新聞社1989
- (日本) 『日本ふーど記』 玉村豊男(1945男)中公文庫1988
- (脳卒) 『脳卒中リハビリ日記』 横田整三(1915男)朝日選書1985
- (ハー) 『ハーレムワルド』 山田詠美(1959女)講談社文庫1990(1987講談社)
- (秀吉) 『秀吉と利休』 野上弥生子(1885女)新潮文庫1968(1964中央公論社)
- (帽子) 『帽子の下を』 宮崎謙一郎(1923男)地域教材社1984(1980 PHP研究所)
- (魔頂) 『魔頂チョモランマ』 今井通子(1942女)朝日新聞社1986
- (見え) 『見ええないオシャベリ』 神津カンナ(1958女)集英社文庫1986
- (IPAL) 『計算機用日本語基本容詞辞書IPAL(Basic Adjectives)』
情報処理振興事業協会技術センター 1990
- (用法) 『現代形容詞用法辞典』 飛田良文・浅田秀子 東京堂出版1991

【主要参考文献】

- 石綿敏雄・荻野孝野 1983「日本語用言の結合価」『朝倉日本語新講座3 文法と意味Ⅰ』
(付録2)朝倉書店
- 言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 小泉保他 1987『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
情報処理振興事業協会技術センター
1987『計算機用日本語基本動詞辞書IPAL(Basic Verbs)』
1990『計算機用日本語基本形容詞辞書IPAL(Basic Adjectives)』
1992『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究Ⅰ 1-計算機用レキシコン
のために(3)-』
- 西尾寅弥 1972『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁田義雄 1980『語彙論的統語論』明治書院
- 飛田良文・浅田秀子 1991『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店
1990「語彙—語義研究への招待」『国文学解釈と鑑賞』55-7

【付記】

本稿は、修士論文「現代日本語の形容詞述語文の構造」(早稲田大学大学院文学研究科
1994. 3.)の一部を修正・加筆したものである。修士論文と本稿の作成の際貴重なご教示を
頂いた先生方に厚くお礼を申し上げる。